

パーソナル・サポート・サービス検討委員会第5回会合（概要）

日時：平成22年11月29日（月）10：00～12：00

場所：合同庁舎4号館1214特別会議室

出席者：宇都宮座長、猪股構成員、岩間構成員、奥田構成員（代理出席・森松NPO法人北九州ホームレス支援機構常務理事）、工藤構成員、五石構成員、清水構成員、鈴木構成員、高沢構成員、玉城構成員、野中構成員、日置構成員、湯浅構成員

【概要】

○ 第2次分のモデル・プロジェクトの応募状況及び実施計画の概要について、事務局より報告。

○ 構成員より、各地域の実施計画に係る意見等を発言。

＜湯浅構成員＞

- ・ 岩手県については、パーソナル・サポーターの想定資格として、主にキャリアコンサルタント、キャリアカウンセラーといった資格が列挙されているが、この検討委員会で議論してきたように、パーソナル・サポート・サービスでは包括的な支援を目指しており、もう少し様々な幅広い領域の相談や技能を想定していただきたい。また、拠点の配置について、盛岡中心と南部とで地域が分かれているが、実施の主体が変わっても県で調整し、両者一体的にやっていただくことが重要である。
- ・ 野田市については、センターの開設日を当面週3日とすることになっているが、対応する人たちの状況によっては臨機応変な対応が必要な場合もあると思われる。集中的な対応が必要な期間というのが人によってはどうしてもあるので、週3日の開設という点についてはもう一度検討していただきたい。また、当初は小さく始めてといくということであるが、既に母子の自立支援、障害者の就労支援の領域では非常に優れた実績を持っているということなので、そうしたところと大きく統合していくような形で発展させていただきたい。
- ・ 長野県については、地域の面的な支援の展開ということを考えると、地域の実情に応じて違いはあるにせよ、実施体制として地域資源全体として様々な領域を包摂、包括する形で色々なところの連携を模索していただきたい。これは長野県に限らない。
- ・ 岐阜県については、日系ブラジル人の方などが多いのが特徴という話があり、外国籍の方が非常に多い地域でモデル・プロジェクトを実施する意義は一つの特徴として考えられる。一方で、地元で中核的に担う団体が想定しづらいとのことであるが、様々な地域、様々な支援のネットワークをどう作っていくかが課題と思われるので、地域の中にある団体との連携を考えていただきたい。
- ・ 浜松市については、支援の仕方としてかなり特徴ある手法を謳っているということ

で、この検討委員会でも議論しているように、就労から相当距離のある人も相談に来ることが想定されているので、幅広い相談者に対応していくための事業展開として、他の団体との連携なども課題になる。特に、生活相談領域をどのようにフォローしていくかということがポイントである。これは浜松市だけに限らない。

- ・ 野洲市については、市民生活相談室が置かれている特徴のある自治体であり、多重債務問題を中心に市役所内のネットワークがよく取れているということで市役所中心のスタイルである。これはこれで特徴があり望ましい形の一つだと思われるが、市役所が中心になりつつ、連携する各種の外部の支援機関の対象者をパーソナル・サポート・サービスの担い手として組み入れる形で事業を実施していただきたい。
- ・ 京丹後市については、京都府がモデル・プロジェクトの第一次分を実施しているが、京都の中心部からかなり距離が遠いこと、自殺予防の課題が大きいということから、府と連携してやっていただくことを前提にやっていただければと考えている。実際には京都府が先行して始めることになるので、研修や事業評価等を京都府と連携して実施していただきたい。
- ・ 大阪府及び豊中市・吹田市については、基礎自治体と広域自治体の役割分担と連携により事業を実施するという特徴のある仕組みになっているという意味で、モデル・プロジェクトとして興味深い形だと考えているが、箕面市からも実施計画書が提出されているので、両者がうまく連携して実施していただきたい。特に、大阪府及び豊中市・吹田市はどちらかという行政主導モデル、行政から外に伸ばしていくようなモデルである一方で、箕面市はどちらかという地域のNPO活動などから発展していくようなモデルであり、また、比重としても就労支援的な大阪府等のモデルと、居場所づくりや相談者を地域として受け止め、生活相談込みで考えていく箕面市のモデルとは、両者が連携するとより大きな力を発揮すると思われるので検討していただきたい。箕面市についても同様である。
- ・ 大阪市については、ホームレスの方などに対して長い取組の実績があるところであり、また、検討委員会で示した考え方の整理などもかなり組み込んで挑戦的なモデルを模索しようとしているので、ぜひモデルの一つとして形を作っていただきたいと考えているが、協力団体とされているところも含めてさらに広い枠組みを構築できればより望ましい。
- ・ 島根県については、社会福祉協議会を軸として考えており、なかなか地域にNPOが多様にあるわけでもないという状態の中での一つのモデルだろうと考えている。他方で、色々な領域で相談活動に従事している人をいかにコーディネートするかがということが力量として問われてくるので、気を付けていただきたい。
- ・ 山口県についても基本的には同様である。地域資源との連携はこれまでの意見と同様である。また、事業推進組織体制について、チーフ・パーソナル・サポーターとして想定されている人たちが各領域から1人ずつ出されているが、包括的な支援という

ことで、様々な領域からそうした方たちが出てくるのは望ましいことではあるが、ともすると役割分担で縦割りになってしまおうと問題があるので、色々な領域から出てきた人たちが一体的に運営していく形が望ましい。

- ・ 徳島県については、特に徳島市などでは行政とNPOのネットワークができていて地域だと認識しており、全県で実施するということでより広い地域でそうした形が作られていくのが望ましい。地域の相談支援能力のレベルアップやネットワークの構築を図る形での事業展開となることが望ましい。
- ・ 全般としては、就労支援を得意としている担い手と、生活相談・生活支援面を得意としている担い手とを両方やっているところは稀であり、行政・民間含めて得手不得手がある。どちらかに偏ってしまうと全体のバランスが失われてしまうので、両者のバランスをいかにうまく取るか。両者の違いが連携の妨げになっている場合もあるので、そうした両方の側面の役割分担と連携をいかに実質的に確保するかというのが、どこの地域でも大きな課題になる。その中で地域の面的な支援に向け、諸団体、受託しているNPOやそうではないNPOも含め、地域の中でのネットワークがより一層広まる形で実施していただきたい。
- ・ 第2次プロジェクトによりプロジェクト地域自体は量的には拡大するが、同時にモデル・プロジェクトの質が薄まるようなことにならないよう、構成員には様々な形でご意見やフォローをお願いしたい。

<工藤構成員>

- ・ 基本的に相談者が来ることを前提としている、困っている方が来てくれることを前提にしている体制組みやネットワークがある。来訪を前提としない、来ることを待たないような人間がパーソナル・サポーターとしていることが重要。
- ・ これまでも色々な施策の中で来ることが前提となりすぎており、来られない人をどうするかという話がある。モデル・プロジェクトではこれだけの人数を雇用できるので、何らかの形で本人の場所などに行くことがスタートにならないと、本当に困窮している方々は発見できないと考えている。
- ・ 成果が雇用に偏ると、0か1かになる。海外でも、何もしていない人を見つけること、何もしていないことがわかることがまず第一であるということを重視している。イギリスなどでは、どこにも属さず知られていない存在がいて何もしていないことが分かったことを一つの成果にするという指標をよく聞く。就業で1というよりも、まずはどこにも引っかけなかった人を見つけたことを1とカウントするような成果指標があってもいいのではないか。
- ・ 地域、エリアを拡大するというのを念頭にした事業スキームを作る必要があり、属人的になりすぎないような、ほかの場所でも展開が可能な事業の仕組みというのを作ることが望ましい。

- ・ NPO等に委託していく場合には、2、3年後に予算がなくなった際に、少しでもいいので事業化ができることを想定して始めることが重要である。1年、2年分の予算を納税者からいただいた以上は、目の前の人々を助けることのほかに、予算が一部なくなっても何とか継続・委託ができるような取組を別途考えていくことが必要になるのではないか。

<高沢構成員>

- ・ 市役所に相談室を置くモデルがあるが、市役所は市民にとって敷居が高いのではないかと。そういうところに相談室を置いていいのか疑問がある。もちろん実際にはそれなりに実績を上げているということであるし、いわゆる支援団体やNPOが全国どこにでもあるわけではないということを考えれば、そのようなモデルもあるとは思いますが、市役所は敷居が高いということはやはり前提に組む必要があるのではないかと。
- ・ 伴走的支援というのは、なかなか自己主張ができないが困っているという人について、整理して困っていることを言うところから始めていくものであり、自己肯定感を持ってもらわないとその人の第一歩が出ないのではないかと。そういう意味では市役所はどうか。しかも公務員がそのままパーソナル・サポーターになると、例えば困窮者が福祉事務所で断られたときに、また同じ役所に行くことに対して抵抗を持たれてしまうのではないかと。敷居の低い相談所、外に飛び出していける体制としてパーソナル・サポーターがおり、役所とは違う立場の人たちが別の立場から話を聞いて、もう一回相談行ってみようという気持ちにさせるということが重要であると考え、その点に懸念がある。
- ・ また、社会福祉協議会も大事な受け皿であるが、そもそも社会福祉協議会が機能して十分な地域資源になっていけば新しい制度は不要である。逆に言えば、今から社会福祉協議会が変わり、全国の社会福祉協議会に行けば大丈夫というのであれば心強い話ではあるが、現状では機能していなかったからこのような制度の議論になっている。

<岩間構成員>

- ・ 地域の特性に応じた柔軟的な運用を図るということはもちろん重要であり、それがなければ実効性が伴ってこないが、一方で、やはりパーソナル・サポートの理念をきちんと形で示してもらう必要がある。今回の応募は行政からであるので、なかなか従来の枠を超えるというところまでは難しいところがあったのではないかと感じている。
- ・ 今後新たな形を実施していくということで、モデル事業としての新たな展開ということであると、一つは就労に距離のある方という、対象者の範囲を広げていくという発想、すなわち、就労に直接つながらなくても、そのラインの上にある支援という、広い対象者像をイメージしながらスタートを切る必要がある。
- ・ また、これは従来から「理念型」として示されたところであるが、就労に距離のあ

る人たちの抱えている課題というのは非常に多様性があるので、そこではネットワークをもってどのように地域を基盤として支えていくのかということがとても重要になる。当該地域の色々な人たちが関与できる形での仕組みづくりが描けているかどうかが大変重要である。

- ・ オーダーメイドの支援をするためには、それを支えていく仕組みが重要になってくる。新たに人を雇ったり、いったん現職を休職してもらって丸ごと新しい仕組みに転入するというだけでなく、様々な形で地域で仕事をしながら、一方でパーソナル・サポーターとしての活動を担っていくというような柔軟で新しい専門職としての就労の在り方も模索していくというチャレンジもやっていかないと、どうしても従来の枠の中にはまる人だけを対象にせざるを得なくなる。新たな対象層にきちんとアプローチするためには、それを支える仕組みも柔軟性のある新たな仕組みで対応していかないと難しいだろう。

<猪股構成員>

- ・ 全体として、就労自立の支援に偏ったつくりになっているところが少なくないという印象を持った。例えば岩手県の場合、事業の評価の仕組みとして、生活福祉・就労支援協議会が内部評価を行い、岩手県雇用対策推進会議が外部評価を行うということになっているが、就労支援協議会は行政機関だけで構成されていて民間が入っておらず、雇用対策推進会議は経営者団体や労働団体で雇用の面が重視されている。こういう形で評価すると、生活支援の部分や心のケアの部分の評価などの評価が落ちてしまい、多角的な評価ができないのではないかという懸念がある。また、3か月をめぐりに就職できるよう取り組むといった目標が掲げられているが、目標を高く持つことは素晴らしいが、こういう社会情勢なので、特に様々な問題を抱えている人を3か月で就労に結び付けることには相当困難がある。最初からハードルを上げてすぎると、入口の段階で就労から遠い人が排除されてしまう可能性があるのではないか、就労に結び付きやすい人を入れ、遠い人が排除される可能性があるのではないかという懸念を持った。野田市や浜松市についても、やや就労自立の支援に傾きすぎているのではないか。

<奥田構成員（森松代理）>

- ・ やはりだいぶ就労に集中しているという印象は受けたが、事業全体的に対象者の絞り込みがなされていない。来た人をどれぐらいの規模で受け入れるかということ懸念している。北九州でも命ネットワークというものがあり、各区に専門相談員を2人配置する形でやっているが、實際上相談の数が多くなり、結局継続支援ができないということになり、結果的に散漫になってしまっている。モデル事業でも、あまり広がりすぎて結果的に就労に関し一生懸命対応できたが生活支援等に関してはどうしても

手が回らなかったとなると、モデル事業としての意味がなくなってしまうので、実績を上げるためにはある程度限定し、継続的・横断的で就労や生活面のバランスを取った形でパーソナル・サポーターの役割を明確にすることが必要であり、対象者を明確にしていった方が結果として見えやすいのではないかと。継続的な就労に特化しない形で実績を立てるためには、もう少し絞り込むことが望ましい。

<清水構成員>

- ・ 資料上明示すべきかどうかは別にして、実務的には医療機関とのつながりも持っておく必要がある。失業状態がしばらく続いている方の中には精神的に鬱になっている、あるいは精神疾患を抱えている方が、人数は少なくとも確実にいるということは周知の事実であり、重症患者的な方を3人ぐらいでも抱えてしまうと支援する側の負担になってしまうので、リスク管理という意味でも、精神疾患、自殺念慮を抱えたような方たちが来たときにはしっかりと医療機関につなぐことを想定しておいた方がよい。保健師や精神保健福祉センターも明示されていたが、例えば岩手県では、岩手医大が自殺予防に非常に熱心に取り組んでいるので、そのようなところとの連携もしっかりと想定しておいた方がよい。
- ・ あわせて、相談員に対し、たとえば抑うつの方は励ましたらいけないというような、鬱や精神疾患を抱えているであろう人たちへの対応方法を日常的にアドバイスできる体制という意味でも医療機関とのつながりがあった方が望ましい。重症の方が来たときにしっかりと支援を引き継ぐという形での連携と、日ごろの鬱状態等の方への対応方法のアドバイスの意味で、医療機関とのつながりをしっかりと持っておくことが望ましい。

<日置構成員>

- ・ モデル・プロジェクトを実施する前段階の計画からは今後変わりうるし、色々な発想や背景があって提案されていると思うので、一つ一つの計画に意見はない。だからこそモデル・プロジェクトとしてやるのであり、これから多様なバックや価値観があるものをパーソナル・サポート・サービスとしてやる自分たちの責任が重いと感じている。
- ・ ずっと課題になっているが、評価と成果をどのように見るかということをも早めに整理する必要がある。スタートはどこでもよいが、事業をやりながら議論をきちんとできないとやりっぱなしになってしまうし、現場の中で価値観に引きずられて行く。このモデル事業は社会をどう見るのか、個人をどう見るのかということに挑戦していると考えており、そういう意見を出し合う場を作らないと、モデル・プロジェクトの時間があつという間に過ぎてしまう、そうならないように我々の工夫や覚悟が必要である。各地のパーソナル・サポーターからホットラインでいつでも相談できるようなも

のを作るとか、巡回して意見をぶつけ合うとか、現場では色々な事が起こると思うが、それを持ち寄るような場を確保することが重要であり、どのようにすべきかと考えている。

<野中構成員>

- ・ 評価のところについて、全国的に共通する成果項目を作る必要がある。比べることができるようにする必要があり、また、どういう段階がどういう段階に行くことを目指すという、ある種の理想像に基づいた評価項目を立てる必要がある。
- ・ 一方で、このままパーソナル・サポート・サービスを永続的に続けるのではなく、どのように社会保障全体の問題・課題が発見できるかという、課題発見型の評価というのが重要であるし、ある程度類型化ができると考えている。様々な現場の中から色々なアイデアが出てくると思うので、そういうものを探るような評価項目というものも必要である

<五石構成員>

- ・ 豊中市、野田市、大阪市、島根県、浜松市など、以前より自治体レベルで頑張っているところが応募されているので、非常に楽しみに感じている。ただし、先ほど指摘があるように、少し雇用に偏っているという印象を受ける。特に3か月を目途に就職できるようするというのは考え直していただいた方がよい。
- ・ 生活訓練給付金やふるさと雇用再生特別基金事業など、NPOに一般公募して雇用を創出する事業をやっているところがあるが、就職支援をしても雇用先がない状況なので、既にある資源・組織だけではなく、それらの事業も柔軟に活用して一つの受け皿にするという考え方はあっていいのではないか。
- ・ 島根県は社会福祉協議会の活用ということであるが、実績はあまりないのではないか。島根にはふるさと定住財団という団体があり、UターンやIターン、新卒の方の支援、無料職業紹介などをやっていると思うが、たとえばそういう団体を主体に考えてはどうか。また、島根はふるさと雇用再生特別基金事業で雇用を作り出すということもやっているのだから、そういう既存の事業を積極的に活用してはどうか。

<鈴木構成員>

- ・ 対象について、色々な人を対象としていると同時に、例えば就労3か月という目標があるが、実際に事業始まったときに就職に近い人を実際選別してしまうという本来の理念とは全く逆の選別が行われるというのは非常に心外である。また、支援の絞り込みについて、京丹後市は生活保護につなぐ前の段階を支援するということであるが、これを非常に生真面目にやると、生活保護にはつなげないという話になってしまいかねない懸念がある。横浜のユースポートが運営しているサポートステーションで

は去年から生活保護課との連携をやっているが、実際に生活保護から職業訓練につながったり就労する方がおり、一時的に生活保護で支えられたことにより、安定してきちんと自分の問題に取り組めたということもあるので、事業としてどういう方を対象にするのかについて、それぞれ地域の事情はあるが、やはりパーソナル・サポートの理念に照らして本当に必要な方に支援が届くような設定が必要なのではないか。支援は柔軟にあらゆる資源を選別なく使っていくべきであり、事業スキームとして使っていく資源が選別されてしまうことがあってはならない。

- ・ 連携について、どの地域も様々な団体や部局の名前が挙がっているが、中核的に動く団体がいない地域もあり、想定しているようなネットワークがどのように動いていくのかはお互い知恵を出し合いながら実際に機能させていく必要がある。今までの既存の枠組みを動かしていくためにそれぞれの知恵を出し合っている体制であれば面白い。
- ・ 浜松市は地域の事業所に協力してもらいすぐ就労につなげる、居場所をつくらないという形としているが、おそらく地域の事業所に困難な方でもつなげるという覚悟があり、かなり工夫して難しい方でも事業所に早い段階で受け入れられてもらうことを心掛けていると思うが、やはり実際にこういう方々は就労から遠いので就職が本当に難しい。通常の就労支援の狭いマッチングでは相当就職が難しいのが現状であり、しっかりと地域の事業所にどういう方々なのか理解してもらいつなげていくということを考えていかないと、就労支援といっても結局就職できそうな人だけが選別されることになりかねないので、就労色が強いからこそどうやって就職に短期間でつなげていくつもりなのか、出口をどう考えているのかなど、そういうところをもう少し詰めていければよい。

<玉城構成員>

- ・ 全体として色々なところがあるのは非常によいし、就労をメインにし過ぎているとは思っていない。むしろ、就労ということを最終的な目標としながら作られていくことがいいのではないかと考えている。ただし、何か月で就労させるといったことにこだわり過ぎてはならない。
- ・ 食事・居場所の提供と同時に、就労の前のいわゆるつなぎ就労、例えば高齢者の家事援助といったことをしながら過ごし、自分を整えながら就労に向けていくということを現実的に沖縄でもたくさんやっているが、そういったつなぎ就労的なものを多くつくっていくことが必要である。
- ・ 野田市や野洲市はパーソナル・サポーターの人数が少なすぎ、これだけではなかなか実績があげられないと思われるので、もう少し増やしてしっかりとやっていただきたい。対象者を絞り込むという意見もあるが、一方では来る人を拒まないという形を沖縄ではやっており、あらゆる人たちを受け入れる中で、あらゆる支援の方法を試行

錯誤でやりながら進めていき、何度もケース会議を開き、協議会につなげて、相談員のスキルアップにつながっていくということをやっている。来た人を拒まない、今回の就労可能というような年齢層の人たちを対象にするということを考えている。

<湯浅構成員>

- ・ いかにか社会的に今度の第2次のモデル・プロジェクトの地域も含めて広めていくかということも併せて考えていかななくてはいけない。この検討委員会の課題として考えていく必要がある。例えば、障がい者制度改革推進会議では委員が各地域に出向いていき、そこでフォーラムを開くことなどにより、自分たちの考えや現在の状態を伝え、現地の方と意見交換をしているという話を聞いた。そういう取組は非常によい。モデル・プロジェクトもそれぞれの地域の実情やこれまでの経緯に合わせて出てきたものなので、それぞれに独自の理由や背景があり、そういうことを学びつつ、こちらのコミュニケーションしたものを伝えて意見交換を重ねていくということが必要である。私としてもアウトリーチを考える必要があると考えている。検討委員会の構成員にも、例えば研修や新しくPSになった方たちとの意見交換などを手分けして行うとか、各地のモデル・プロジェクト地域で話してくる、現場を見てくるなど、我々自身がどう関わっていくのかということも考える必要がある。

<森松構成員>

- ・ 湯浅構成員の意見に賛成である。各構成員の意見を聞きながら自分たちの検証もしたが、結局それぞれの地域で何をするのかということについては非常に特徴があるので、例えば連携をどう取るのかとか、就労にちょっと重みがあるのかというのはそれぞれだと思うが、一方で、第2次分の13地域だけではなく、既に始まっている私たち5地域も含め、最低何が大事なのか、何がなされているのかということの検証が必要ではないか。
- ・ 自分が参加している定着支援センターの連絡協議会でも一番議論になっているのは、それぞれの団体がそれぞれのやり方でやっているということである。他の地域のやり方に対する意見交換ができない。連絡協議会があっても、各団体のやり方についての互いの修正がなかなかできない、任せたら任せっぱなしという形になる。他の団体、我々自身にもここはもう少しこうしたらいいのではないかといい場合、お互いを高め合っていく、何が目的だったのか検証する場が必要である。今回はモデル事業であり、将来的に全国に広がっていったためのものであるため、モデル事業で何を獲得するのかということは重要であり、検証する制度というのは非常に重要であると考えている。

<高沢構成員>

- ・ 就職というのはゴールではない。就職しても戻ってくる方が数多くいるというのが現実。伴走的支援ということで、就職できた後もどう伴走支援をしていくのかということも大きな課題である。事業が始まると就職した人をどうするのかという点がなかなかできていないと思うので、そういったところにも伴走的支援をするということについて、もう一度原点に戻って話し合いたい。たとえば医療との関係でも、病院の熱心なワーカーの場合、こちらに相談がきて生活保護などにより地域で暮らせるようにするが、その後当事者が退院するとワーカーは関われなくなる。パーソナル・サポーターは伴走的支援、人間関係が貧困しているところに一緒に寄り添うということの一つの目標として掲げているので、ずっと関わり続ける、見捨てない、見守るというスタイルを作り続けるためにどのようにやっていくのかについて、この検討委員会において、有識者の方も多くいる中で、お互いにケースを出し合いながら話し合うとよりよいモデルになるのではないかな。

<野中構成員>

- ・ 地域の断片化がとんでもなく進んでいる。たとえば介護保険の関係者は障害福祉の方のサポートをしていない、医療は自殺対策の方を知らないなど地域の中でバラバラである。
- ・ 地域でフォーラムを表面的にやるよりも、悪いところも含めたコンサルテーションをやるべきだと思うが、そのようなことを本気でやらないと地域がマネジメントされていない。ホームレスに対するサポートをやっても障害福祉の方が全然知らなかったり、医療も切れたり、また、就労支援の方のリハビリテーションも別にある。そのように地域の中で断ち切れているということを考え、地域の中のネットワークを再生するというのが非常に重要であるということがゴールであり、この事業はいかに地域が断片化しているのかということを見せるための事業なのではないか。モデル事業から問題点が出てくるということの方が重要である。

<湯浅構成員>

- ・ 形式的にフォーラムをやるのではなく、実践的な意見交換ができるような場を作っていくことが必要であり、講師として行くよりは、現場に行き話合いに行くということが必要ではないか。
- ・ 今後の進め方についてはこの検討委員会において考える必要がある。この検討委員会の下に地域の担当のようなものを作って継続的に意見交換し、この検討委員会に持ち帰ってさらに議論するというやり方もある。事務局も含めて考えて、原案を出してまた相談する形でもよい。

<日置構成員>

- ・ 検証の場を持つ部会のようなものを作ってはどうか。実働で動かないと、月1回やるのでは限界があって、持ち帰ってまた案を出してというのではどんどん時間が過ぎていく。
- ・ 現場が意見交換したり、パーソナル・サポーター同士の意見交換も重要であるが、それを集約してチーフ・パーソナル・サポーター、もう少し広く見られる人たちが集まり、社会にどのように発信するかといったものを含め、この事業をどう円滑に意味のあるものにして運営していくのかということ、メーリングリストを使うなり、例えばインターネットを使ってテレビ会議やネット上での会議をするなり、やり方も含めて事務局だけに委ねるのではなく、何人が議論して進めていけるところを作ってはどうか。

<森松構成員>

- ・ 先行の5地域ですらどんなことをしているのか案外分かっていない可能性がある中で、各地域のやり方について具体的に検証していく部分を持たないと進んでいかない。ここは変えるべき、これは面白いといったことを出していき、その中でやり方が様々な部分や共通的に貫いていこうという方向性・指針を抽出しないと、全国に広がってもそれぞれの団体のニーズや制限などにより、結局受け皿による制約のあるコーディネートになってしまう。それを超えるものというのが今から必要ではないか。

<湯浅構成員>

- ・ とりあえず事務方を含め、作業部会のようなものとしてどういうものを作っていくのか議論する。

<工藤構成員>

- ・ 自治体から依頼を受けてNPOがやっている若者支援のケース会議を外部からコンサルタントしており、基本的にはネットで無料でやっているが、2週間に1回1時間半ぐらいやっているとだいたい終わる。今後はできればそれを外に開きたいと考えている。各団体がミーティングをやるものを、個人情報には配慮しつつ、どんどん開いていった方がよい。
- ・ PSの事業や、ホームレス支援の事業に関心のある方というのは、たぶん全部の人口からしたら1%か2%の人であり、広く日本社会でどんどん知らせていくためには、少なくとも誰でも聞きに来れる体制だけは作って開いていく必要がある。外に開いた形で物理的なものも動けば一番よいが、部会を立ち上げるのであれば、できれば開いていくことが重要である。

<湯浅構成員>

- ・ 具体的にはたとえばこの会議をユーストリーム中継するということが。

<工藤構成員>

- ・ そのようなこともあり得る。ここに来なければ聞けないということでは知れる人の限界が出てきてしまうので、もっと開いてもいいのではないか。

<事務局>

- ・ 第1次分のモデル・プロジェクトについてもそれぞれ少しずつ対象も違い、地域の特徴もいろいろな差異があり、その共通項を拾い出すようなことが必要だと考えている。ただし、モデル・プロジェクト自体はこれから支援が始まる段階であり、現在は各団体の方にご協力いただき、モデル・プロジェクト開始以前にパーソナル・サポート的に関わったケースから共通項を抽出できないかという調査のお願いをしているところ。言ってみれば意見交換の材料づくりを進めつつある。
- ・ 第2次分のモデル・プロジェクトが動き出すのはちょうど年度替わりの時期になると思われるので、それまでの間にこれまでの実践をベースにして、考え方の整理をブレイクダウンして示せるような材料づくりをして討議をしていただけないかと考えている。
- ・ 第2次分のモデル・プロジェクトについて補足的に申し上げると、対象をどのように設定するという点については、地域によってある程度対象を絞り込んでいることもあるが、パーソナル・サポート・サービスの考え方の整理において、対象を限定しない考え方だとかなり強く明記したので、そういう意味で特定の対象を念頭に置かない企画が出てきたというのはそういう背景ではないかと考える。
- ・ また、人口規模が小さい地域の場合、対象を絞り込まない形でないとなかなか事業が成立しない、できないといった事情もあると考えられる。その中でもそれぞれ外国人の多い地域や、ホームレスの多い地域など特徴があり、いわゆる生活就労困難者ということを中心に置きつつ、特定の部分に力を入れるということについては明記していただく方がいいと考えていたところである。ただし、就労に距離のある方が排除されないようにということについては、8月の考え方の整理の段階でもかなり明記したところではあるが、その点は徹底しなければいけないポイントであると考えている。
- ・ 対象者を絞らない場合に相談者で溢れかえってしまうのではないかとこの点については、色々な相談機関のアンテナやネットワークに引っかかり、かなり長期の伴走的な支援が必要な方も事業に組み入れてやっていく中で、パーソナル・サポートとしての支援をする方、別の支援につなげていく方という振り分けについての考え方の整理をしていただくことが必要であると感じたので、そういったこともどう考えるか、また、支援対象の方がどのように入ってくるとかという考え方についても、整理していくことが必要であると考えている。

- ・ 市役所での実施ということについては、単にプロジェクトも市役所の職員が横滑りしてパーソナル・サポーターになるという形にはしておらず、市で直接実施する場合でも嘱託職員や雇い上げという形で計画を立てていると考えている。また、敷居が高いという点については、敷居が高くなならないような工夫をどのように取るか、あるいは外に出かけていくなど、そういうところは工夫をしていただきたいと考えている。
 - ・ やや細かいところの指摘については、パーソナル・サポートの理念に反しないような形で、それぞれの自治体とコミュニケーションを取ってやっていきたい。最後に、単に一団団で受ける事業ではなく、いろんな領域、いろんな現場で活躍されている方をパーソナル・サポートとして組み込んでいくことが重要であるということは一番意識をしているので、まだ表面上よく見えないところについては、そういった点についてご配慮いただきたいということについて再度コミュニケーションを取りたい。
- 宇都宮座長より、事務局において構成員からの意見を整理して各自治体に伝え、事業内容について検討することを求めるよう発言。
- 第1次分のモデル・プロジェクトに係る構成員より、各地域の現在の状況について報告。
- 事務局より、第2次分のモデル・プロジェクトに係る今後の進め方として、検討委員会の意見を取りまとめて各構成員に確認いただいた上で、12月にセーフティ・ネットワーク実現チームにおいて、応募状況及び検討委員会からの意見について報告する旨について説明。

(以上)